

編集後記

令和最初の『大衆文化』をお届けいたします。

本号は座談会一本、論文四本の掲載となりました。

座談会は後藤隆基氏コーディネートによるもので、本誌へのまとめも同氏が担当されました。二〇一八年十月七日に開催されたシンポジウム「新派再考」内で行われた座談会「新派百三十年とその未来」には、喜多村緑郎氏、河合雪之丞氏、齋藤雅文氏が登壇され、司会は神山彰氏が進められました。齋藤氏は二〇一七年に乱歩の『黒蜥蜴』をもとに同名の脚本を手がけられ、東京・三越劇場にて喜多村氏の明智小五郎、河合氏の黒蜥蜴で上演された縁もあります。座談会の中で喜多村氏は新派において二枚目が抱えるストレスなど、演者ならではの興味深い視点で語っています。

石橋剛氏の論文は、児童文学者大石真の「教室二〇五号」を中心に、大人と子供の絶妙な関係性に焦点が当てられ、従来の評価に一石を投じる論旨となっています。川下俊文氏は夢野久作の日記を丹念に繙き、論じられることの多い父杉山茂丸との葛藤だけでなく、高等教育不要論を説く父を説得して高校受験に邁進する中、友情を育んでいく姿を

出現させ、久作の青少年期の様相に再考を促しています。姜泰雄氏の論考は、朝鮮を代表する推理小説家の金来成が、作中でスパイを悪人として設定する特徴から、他に類を見ない「孤立」した作家であるという従来の評価に疑問を呈し、あえて乱歩作品と比較することで、新たな価値を付帯させようと試みられています。そして丹羽みさと氏は、江戸川乱歩の「押絵と旅する男」の恋愛について、八百屋お七や覗き見をキーワードとして分析し、登場人物の不快が肉体的ではなく精神的な理由に依拠していることを解き明かしています。

いずれも挑戦的な論考が揃いました。読書の秋を充実させる一冊となるのではないのでしょうか。